

家族で古文書の解読にチャレンジしてみよう

みなさんは、古文書という言葉聞いて、どんなことを想像しますか。「古くさい」「字がくずれていて、読みにくい」「漢字ばかりで意味が分からない」など、マイナスのイメージしかないかもしれません。

でも、同じ日本人です。私たち現代人が、昔の人が書いたものを読めないときらめるのは、早いと思います。どこかに解読できる手がかりがあるはずですよ。

この講座では、当館所蔵の古文書から、親しみやすいものを選び、その字体の特徴から、あてはまる文字や言葉を見つけて、文章の意味がわかるように工夫しました。困った時は、ヒントを見てくださいます。ひと通り読んでみて、昔の人が書いたものでも、何となく読めそうだなと思っていただけたら、とても嬉しく思います。

それでは、始めていきましょう。

進め方

講座の進め方を簡単にまとめました。

○ この講座は、対面で行うものではありません。ここに掲載したスライドをもとに、閲覧されている方が学ぶことを基本とします。一人で考えても、家族で考えても、どちらでもよいです。

○ 古文書の横に、解読した文字を入れています。所々「穴あき」にしました。そこにあてはまる文字を入れていきましょう。

○ 分からない時は、ヒントを見て考えましょう。

○ このテキストは、『くずし字用例辞典』等の参考図書を使いません。はじめは、単語や句を解読します。次に、その単語や句をつないで、ひとつの文にします。読み下し文に直して読めたら合格です。

○ 課題ごとに答えを記します。自分で答え合わせをしてみてください。

返読文字

古文書は、くずし字に加えて、漢字だらけの候文（そうろうぶん）になっていく場合があります。「候」は、今日の「です」「ます」に当たる言葉です。

私たちがふだん目にする文章と大きく異なるため、古文書を敬遠することは、やむを得ないことかもしれません。

しかし、現代語の中には古文書由来のものがあり、無意識のうちに、その言葉を使っていることがあります。

返読文字は、そのよい例です。返読文字とは、漢文を訓読する時、「ヲ、ニ、ト、ヨリ」がなくとも、語順を逆にして、上に返って読む字のことを言います。その代表的な返読文字を紹介します。

☆否定詞の「不」

「不意」（ふい）は、「思いもよらない」という意味です。

不は、返し読みをします。読み下す時は、「意にせず」となります。そのほかに、「不安」「不一致」など不を使う熟語が数多くあります。

チャレンジしてみよう

○返読文字「不」を用いた熟語を集めてみましょう。ヒントとして、熟語の意味を書き添えました。□に当てはまる文字を書き入れてみましょう。

①不 □ 意味（思わず知らずすること） 読み下し（おぼえず）

②不 □ 意味（学問のないこと） 読み下し（まなばず）

③不 □ 意味（心に満たないこと） 読み下し（みたず）

④不 □ 意味（利益のないこと） 読み下し（りせず）

⑤不 □ 意味（かわらないこと、不□と流行） 読み下し（かえず）

⑥不 □ □ 意味（燃えないもの） 読み下し（もえざるもの）

チャレンジしてみよう

○前のページの答え

- ①不覚（ふかく） ②不学（ふがく） ③不満（ふまん） ④不利（ふり）
⑤不易（ふえき） ⑥不燃物（ふねんぶつ）

☆否定詞の「否」

「否定」（ひてい）は、「そうでないと打ち消すこと」を意味します。

否は、不と同じように返し読みをして、読み下す時は「定まらず」となります。ただし、「承知と不承知」を意味する否応（いやおう）や否認（いなせ）は、返し読みをしません。

☆否定詞の「非」

「非常」（ひじょう）は、尋常でないこと、世の常でないことという意味です。

非は、返し読みをします。読み下す時は、「つねにあらず」となります。そのほかに、「非番」「非公開」など非を使う熟語が数多くあります。

チャレンジしてみよう

○返読文字「非」を用いた熟語を集めてみましょう。ヒントとして、熟語の意味を書き添えました。□に当てはまる文字を書き入れてみましょう。

①非 □ 意味（ルールにはずれた行い） 読み下し（おこないあらず）

②非 □ 意味（喜怒哀楽の情がないこと） 読み下し（なさけあらず）

③非 □ 意味（運のわるいこと） 読み下し（うんあらず）

④非 □ 意味（人の道にもとること） 読み下し（みちあらず）

⑤非 □ 意味（力のよわいこと） 読み下し（ちからあらず）

⑥非 □ □ 意味（常識にはずれること） 読み下し（じょうしきあらず）

チャレンジしてみよう

○前のページの答え

- ① 非行（ひこう）
- ② 非情（ひじょう）
- ③ 非運（ひうん）
- ④ 非道
- ⑤ 非力（ひりき）
- ⑥ 非常識（ひじょうしき）

☆助動詞の「可」（べし）

「可能」（かのう）は、「することができると」を意味します。

可は、返し読みをします。読み下す時は、「能（あた）うべし」となります。これを打ち消す言葉が「不可能」です。返読文字が含まれているので、読み下す時は「能うべからず」となります。

○返読文字「可」を用いた熟語を集めてみましょう。ヒントとして、熟語の意味を書き添えました。□に当てはまる文字を書き入れてみましょう。

① 可 意味（変え得ること） 読み下し（かえるべし）

② 可 意味（火をつけるとよく燃えること） 読み下し（もえるべし）

チャレンジしてみよう

③可 意味（非常にとまではいかないが、並み一通りを越える程度で

あること） 読み下し（なるべし）

④可 意味（いじらしいこと、かわいらしいこと） 読み下し（あわれむ

べし）

⑤可 意味（肉眼で見えること） 読み下し（みるべし）

⑥可 意味（提出された議案の内容をよいと認めて決定すること）

読み下し（けっするべし）

⑦不可 意味（欠くことができないこと） 読み下し（かくべからず）

チャレンジしてみよう

○前のページの答え

- ①可変（かへん）
- ②可燃（かねん）
- ③可成（かなり）
- ④可憐（かれん）
- ⑤可視（かし）
- ⑥可決（かけつ）
- ⑦不可欠（ふかけつ）

☆形容詞の「無」・「勿」・「莫」（なし）

「無論」は、「とやかく論ずるまでもなく明らかなさま」を意味します。無は、返し読みをします。読み下す時は、「論なし、論ずるなかれ」となります。「勿論」も「言うまでもなく」という意味があり、勿は、返し読みをしますから、読み下す時「論なし、論ずるなかれ」となります。

○返読文字「無」を用いた熟語を集めてみましょう。ヒントとして、熟語の意味を書き添えました。□に当てはまる文字を書き入れてみましょう。

- ①無 □ 意味（物を言わないこと） 読み下し（げんなし）

チャレンジしてみよう

② 無

意味 (どこまでも続くこと) 読み下し (かぎりなし)

③ 無

意味 (形のないこと) 読み下し (かたちなし)

④ 無

意味 (欠けたところのないこと) 読み下し (けつなし)

⑤ 無

意味 (私欲がないこと) 読み下し (こころなし)

⑥ 無

意味 (そのことをするのに必要な資格がないこと)

読み下し (しかくなし)

⑦ 無

意味 (やくに立たないこと) 読み下し (いみなし)

チャレンジしてみよう

○前のページの答え

- ①無言（むごん）
- ②無限（むげん）
- ③無形（むけい）
- ④無欠（むけつ）
- ⑤無心（むしん）
- ⑥無資格（むしかく）
- ⑦無意味（むいみ）

○返読文字を用いた句について、読み下しを書いてみましょう。例にならつて、（ ）にあてはまる文字を入れてみましょう。

（例）不待言 げんを （またず）

意味

【わかりきったことで、あらためて言うまでもない】

①無覚束

おぼつか

（ ）

意味

【対象がぼんやりしていて、つかみどころがない】

②無拠

よんどころ

（ ）

意味

【そうするよりほかにしようがないこと】

チャレンジしてみよう

○前のページの答え

①おぼつかなく ②よんどころなく

そのほかに無相違は（そういなく）、無異議は（いぎなく）、無恙は（つつがなく）と読んでいきます。まだまだたくさんありますから、国語辞典などを使って調べてみてください。

それでは、実際に古文書を読み解いていきましょう。

今回テキストにした古文書は、明治時代の教科書です。村田海石という書の達人が執筆し、編集したもので、全国的に使用されていました。

テキストの中で、返読文字は一か所登場します。

「有之」は、語順を逆にして「これ有り」と読みます。「無之」（これ無し）の反対の意味になります。

東京府學務課編輯

小學校習字帖

高等科下
第二年

版權所有

東京府



この本は、明治二〇年（一八八七）九月に発行された、高等小學校二年生の習字の教科書です。このころの小學校は、修業年限が尋常科四か年・高等科四か年となっていました。年齢は、六歳から一四歳に至る八か年でしたから、高等小學校二年は、今の小學校六年生に当たります。当時の小学生は、卒業後に就職するものと考えられていましたから、実用的なことを学びました。

この習字帖も、「日用書類」と題して、実社会で目にすることが多いものを教材にしています。さらに、すべてくずし字を用いて、実際に読んだり書いたりできるように、例文を示しています。

当時の小学生は、こんなにもむずかしい教科書を使っていたのです。その一部をここにのせました。□の中に、あてはまる文字を入れてみましょう。

急
之
認
之
書
記
両
雇



(答え)

至急之認物有之、書記両三名雇入

読み下しは「至急の認(したた)め物これ有り、書記
 両三名雇い入れ」となります。すぐに書き記したいもの
 があるため、二三人の書記を雇い入れたいという意味で
 す。「有之」は返読して「これ有り」という読み方をし
 ます。

いりて西園に下され交心給料を日

候
バ
周
旋
尤
給
は
日

(者)

度は皆執事達若し人西心留り口花

度
候
間
筆
之
御
心
り
御
座

(答え)
度候間、執筆達者之人、御心当り御座候ハゞ、御周旋下され度、尤給料は日

読み下しは「度候（そうろう）あいだ、執筆達者の人
お心当り御座候はば、御周旋くだされ度（たし）、もつ
とも給料は日：：」となります。執筆達者の人に心当たり
があれば世話をしてください。ただし、給料は日：：とい
う意味です。

「間」（あいだ）は接続助詞のように原因・理由を表
します。「尤」（もつとも）は、この場合「ただし」と
解釈します。

「周旋」（しゅうせん）は耳慣れない言葉ですが、間
に入って世話をすること、とりもちをすることを意味し
ます。

(尔)

給

拾
銭

給

積
り

(尔)

御
座

(連)

此
段

含
置
下

候

給にて五拾銭支給候積りに御座候
間、此段も御含置下され度候

(答え)

給にて五拾銭支給候積りに御座候
間、此段も御含置下され度候

読み下しは「(日)給にて五拾錢支給候(そうろう)積りに御座候間、この段もお含み置き下されたく候」となります。日給五十錢(一円の半分)を支給するつもりですから、この点についてもご理解くださいという意味です。

現在「あいうえお」のような五十音のひらがなが用いられています。あ行は「安・以・宇・衣・於」をくずしたもので、平安時代に成立したことは、社会科で学んでいると思いますが、実は仮名文字はこれだけではないのです。「あ」と読む仮名文字は、ほかに

阿　　ぢ　　ゑ

があります。それぞれ「阿」「愛」「悪」をくずした字です。テキストで元の漢字を括弧書きで示したところはすべて仮名文字です。これらを変体仮名と言います。

く

これは「者」をくずした文字で、「は」と読みます。

よ

ふ

これは「尔」をくずした文字で、「に」と読みます。

連

これは「連」をくずした文字で、「れ」と読みます。

変体仮名で言葉を作ってみました。どのように読むとよいでしょうか。

- (1) 見屋古 (見屋古) (2) あもふ羅 (可春亭羅)

地租に納金四割取戻しを為す旨
 打臥居山内志也

風邪
打臥居
甚恐

(里)

地租
納金
期限之所

(2) (1) (答え)
 みやこ↓都
 かすてら↓カステラ

(答え)

地租上納金、明日期限之所、両三日
前より風邪にて打臥居候間、甚恐入

読み下しは「地租上納金、明日期限のところ、両三日
前より風邪にて打ち臥せ居り候間、甚だ恐れ入り」とな
ります。地租は、明治六年以降土地に賦課された租税で
金納することになっていました。この文書は、明日期限
のところ二三日前より風邪にて横になっていたため、大
変恐れ入り……という意味で、あとの文に続きます。

二つの変体仮名が含まれています。

ㇿの元の漢字は「里」で「り」

ㇾの元の漢字は「尔」で「に」

と読みます。

得
共
別
封
円
差
置
二
付

取
計
依
頼

以得共、別封金拾円差上置候二付
 上納御取計下され度、御依頼申候

(答え)
 候得共、別封金拾円差上置候二付、
 上納御取計下され度、御依頼申候

読み下しは「候（そうら）えども、別封金拾円差し上げ置き候に付き、上納御取り計らい下され度、ご依頼申し候」となります。甚だ恐れ入りますが、別封の金十円を渡して置きますので、上納について取り計らいをお頼みしますという意味です。

敬語の「御」や動詞に付く「候」のくずし字は、多様にあります。

「御」
御 御 御 御 御

「候」
候 候 候 候 候

「御」は御周旋、御取計、御座候など丁寧にものごとを言う場合に使い、「候」は打臥居候、申候など他の動詞の連用形に付いて、その動作を丁寧にも、また重々しく表現する時に使います。

このテキストで使用した文をつなげてみました。読み下してみましよう。

至急之禮物ありと云ふ証あり名産入

度い旨執事達者人西心留り口を

いづ西園能下されなむ給料を日

給りて五拾弍支給し積りふ西使儀

月法あり西舎並ふとま度し

このテキストで使用した文をつなげてみました。読み下してみましよう。

地祖の納を問ひ知所とある二日前
よる風邪よそおひ居山あり志也入

いふ其あ動金拾圓りよと置候と付
之納計元計とされ度よ依頼り山